

平右衛門遺跡 (第4次) 鴻巣市

「立地と環境」

平右衛門遺跡は、JR高崎線北鴻巣駅の南東約2kmの鴻巣市箕田に所在する、標高約16mの大宮台地上の遺跡である。遺跡の所在する大宮台地は、遺跡周辺では北西方向へ半島状に延びており、東側には元荒川が、また西側には荒川が南東方向へ流れている。周辺の遺跡は、この大宮台地や元荒川の自然堤防上に立地している。平右衛門遺跡の周辺には、旧石器時代では大宮台地上の新屋敷遺跡がある。ナイフ形石器や尖頭器のほか、石器集中地点や礫群が見つかっており市内で最もまとまった資料である。この

ほか、中三谷遺跡でもナイフ形石器や角錐状石器、赤台遺跡では瀬戸内地方に特徴的な国府型のナイフ形石器に類似した石器が出土し、注目されている。

縄文時代では、草創期の遺跡として、中三谷遺跡で有舌尖頭器が、また富士山南遺跡で爪形文系土器が出土した。早期は遺跡数が増加し、中三谷遺跡から押形文系土器、赤台遺跡から条痕文期の竪穴住居跡や炉穴群が見つかった。中期は集落も増加し、赤台遺跡、馬室小校庭内遺跡、新屋敷遺跡等で加曽利E式期の集落が確認されるようになる。続く後期でも赤台遺跡で称名寺式期、また中三谷遺跡で堀之内式期の竪穴

住居跡群が発見された。

弥生時代の遺跡は極めて少なく、登戸新田遺跡で吉ヶ谷式期の方形周溝墓が、九右衛門遺跡で終末期から古墳時代前期にかけての集落跡が見つかった。

古墳時代になると遺跡数は急激に増加し、宮前本田遺跡、大間原遺跡、馬室小校庭内遺跡、赤台遺跡、新屋敷遺跡、中三谷遺跡等で前期の集落が確認できる。特に中三谷遺跡は、古墳時代後期以降まで続く長期的な集落である。一方、古墳は後期になって箕田古墳群や新屋敷遺跡等で大規模な古墳群が形成される。生田塚遺跡や馬室埴輪窯跡といった埴輪窯の開窯もこの頃である。生田塚遺跡は竪穴住居跡、埴輪窯跡、工房跡、粘土採掘坑等も確認された工人集落で、埴輪製作跡の様相が明らかになっている。この地で製作された埴輪は、周辺の埼玉古墳群や笠原古墳群に供給されたことが明らかになっている。

奈良・平安時代では、遺跡数が減少するものの、古墳時代の集落が継続する形で、宮前本田遺跡や赤台遺跡、中三谷遺跡等で集落が認められる。赤台遺跡では8世紀前半の竪穴住居跡が検出された。

中・近世の遺跡としては、城館跡として箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡のほか、大間地区の源経基館跡等が知られている。箕田館跡推定地である九右衛門遺跡では、詳細な

- 所在地
鴻巣市大字箕田 3734 番地 3 他
 - 実施期間(事業者)
令和4年4月～令和5年1月
(国土交通省関東地方整備局)
 - 調査面積
3,300㎡
 - 遺跡の種類
集落跡
 - 主な遺構
- | | |
|-------|---|
| 第16地点 | 中世(竪穴状遺構1・井戸跡1)、
近世(土壇10・溝跡26・ピット50) |
| 第17地点 | 奈良・平安(住居跡4)、中世
(土壇18・井戸跡2・溝跡5・
ピット15) |
| 第18地点 | 奈良・平安(住居跡6)、中世
(土壇37・井戸跡5)、近世(建
物跡4・溝跡10・ピット30) |

時期は不明なもの、大型の堀跡や中世陶磁器類が多量に出土した。また、中三谷遺跡では「コ」の字状に巡る堀跡が、新屋敷遺跡でも二重の堀跡が見つかっており、中世の館跡と推定されている。このほか、本遺跡に近い宮前本田遺跡では堀跡は、検出されていないものの、中・近世の掘立柱建物跡や井戸跡、地下式墳や溝跡が確認されており、周辺に館跡の存在が推定されている。

「発見された遺構」

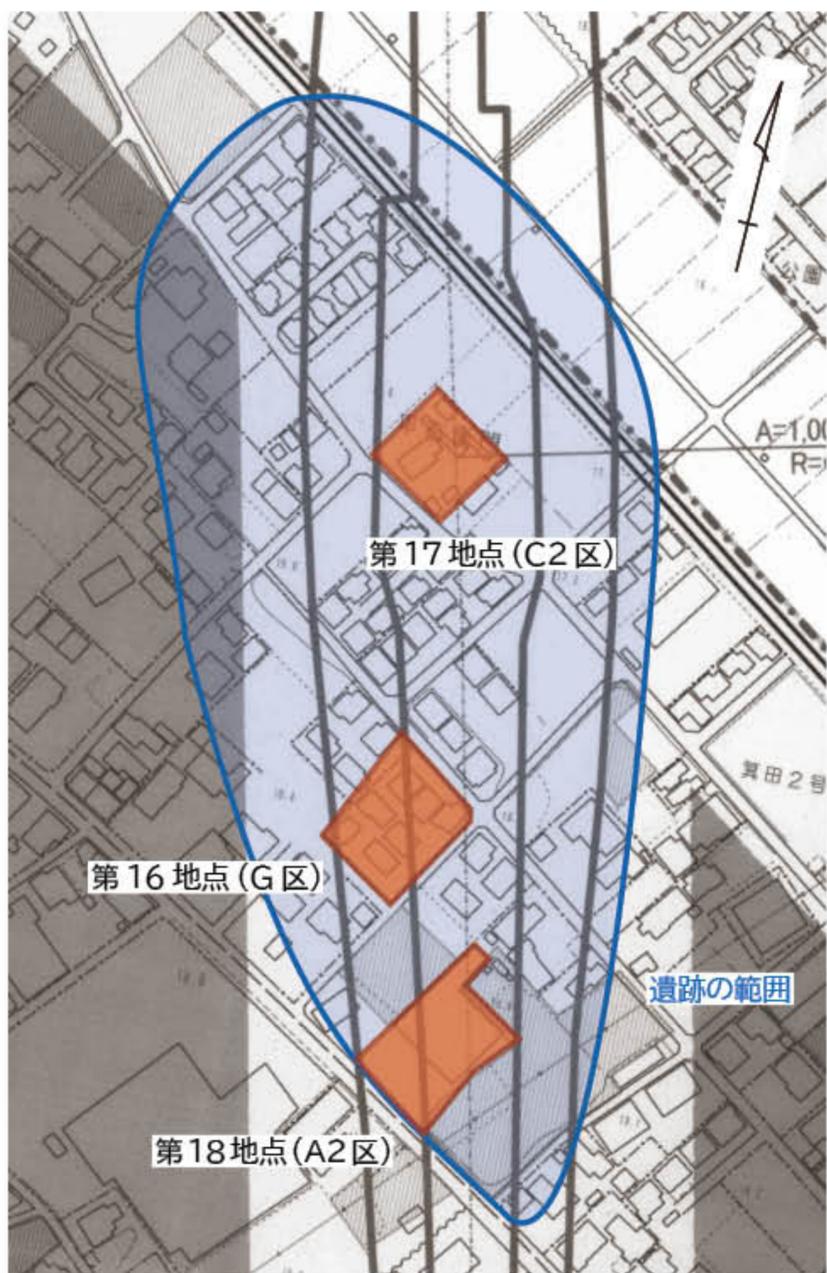
平右衛門遺跡第4次調査からは、奈良・平安時代と中・近世の遺構が検出された。調査区は、3つの地点に分かれており、着手順に第16地点、第17地点、第18地点と呼称した。

第16地点からは主に奈良・平安時代、17地点からは主に奈良・平安時代と中世、第18地点からは主に奈良・平安時代と中・近世の遺構が検出された。

第16地点

中世は、竪穴状遺構1基、井戸跡1基が検出された。近世は土壇10基、溝跡26条、ピット50基が検出された。

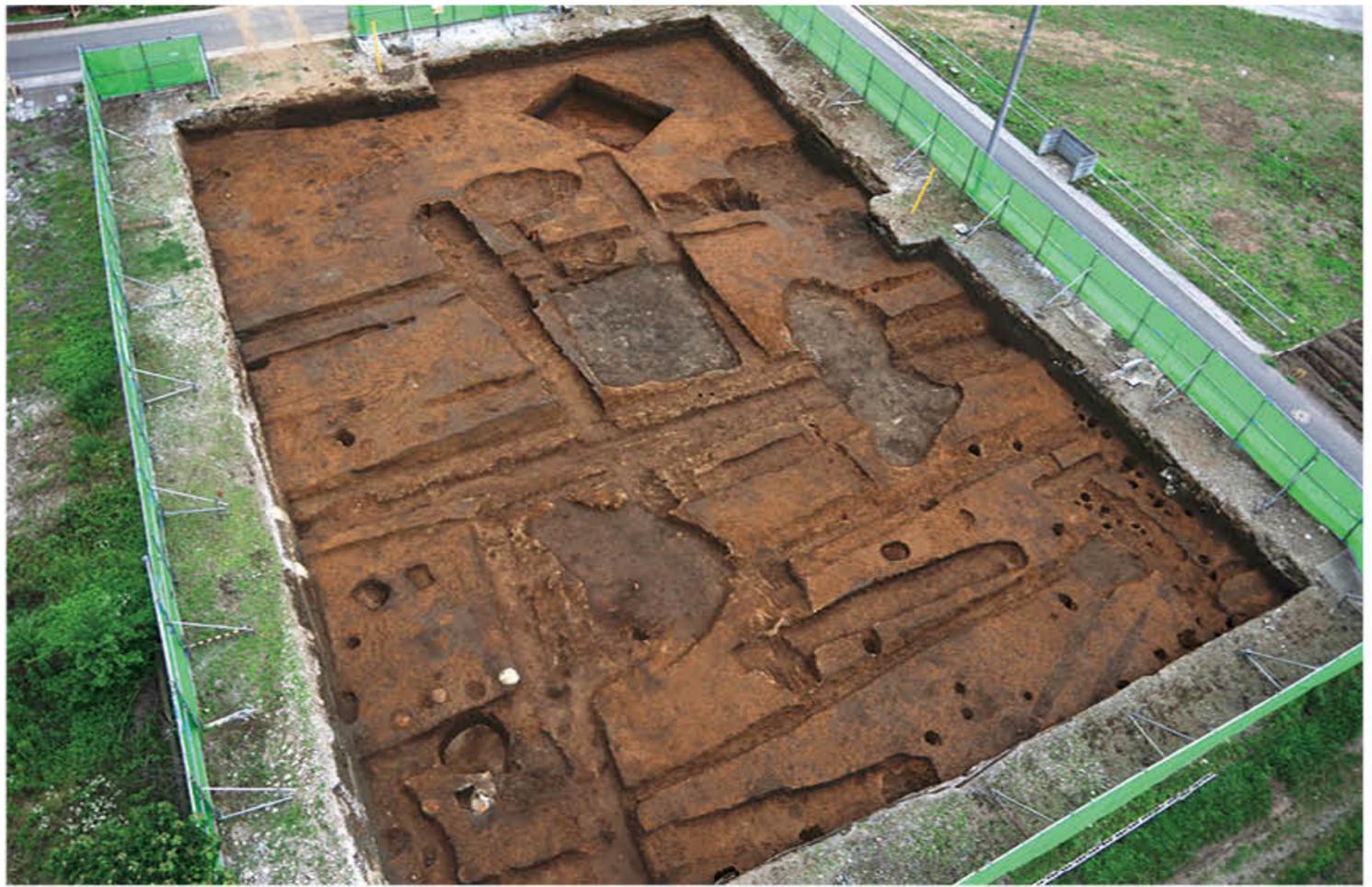
中世の竪穴状遺構は、調査区の東側から検出



調査区位置図

I 令和四年度に調査をした遺跡

された。長軸3m程度の楕円形で深さ50cm程度の平面形の掘り込みであった。
最も多く検出されたのは、溝状の遺構であり、溝跡の方向は、旧中山道と平行、あるいは直交するものである。攪乱が著しく、遺構の残存状



第16地点 調査区全景

は、縦穴住居跡6軒が検出された。中世は土壇37基、井戸跡5基が検出された。近世は建物跡4棟、溝跡10条、ピット30基が検出された。
奈良・平安時代の縦穴住居跡は、調査区の北東側を中心に縦穴住居跡が6軒検出された。隣

況は、良好ではなかった。

第17地点

奈良・平安時代の縦穴住居跡4軒、中世の土壇18基、井戸跡2基、溝跡5条、ピット15基が検出された。

奈良・平安時代の縦穴住居跡は、調査区の中央から西側にかけて4軒検出された。全体に、攪乱が著しかったが、第9号住居跡では、カマドが良好に遺存しており、甕などが検出された。
中世溝跡の内、第7号溝跡は幅5m、第21号溝跡は幅3.5mの規模の大きな溝であった。

第18地点

奈良・平安時代は、縦穴住居跡6軒が検出された。中世は土壇37基、井戸跡5基が検出された。近世は建物跡4棟、溝跡10条、ピット30基が検出された。
奈良・平安時代の縦穴住居跡は、調査区の北東側を中心に縦穴住居跡が6軒検出された。隣接する調査区の住居跡の検出状況から、第18地点は集落の縁辺部に相当することがわかった。どの縦穴住居跡も、攪乱によって遺存状況は良好ではなかったが、第25号住居跡からは、カマド内から、土師器が良好な状態で検出された。
近世の第1号溝跡は規模の大きなもので、旧中山道に平行して検出された。県道に隣接しているため、壁面が崩落する危険性があるため、南西側の壁は検出できなかった。検出された部分では、幅2m以上、深さ2m程度であった。

近世の建物跡としたものは、幅30cm程度、深さ5〜30cm程度の溝を掘削し、この中に粘土質の土を詰め込み、突き固めたものであり、重量を受ける建物（倉庫、土蔵など）の基礎と想定されるものである。旧中山道に隣接し、これと直交する方向に4棟が検出された。



第17地点 調査区全景

東側からは、幅2mの間隔をもって平行する2条の溝跡が検出されており、中山道に直交する道路の側溝の可能性も考えられたが、硬化面は検出されなかった。



第17地点 第9号住居跡

「まとめ」

縄文時代については、土器片が遺構の覆土から数点検出されたが、遺構は検出されなかった。

奈良・平安時代については、令和3年度、4年度の調査成果から、北側の低地を望む集落が、台地の縁辺部から中央部に広がっていたと見られ、その一部である竪穴住居跡が10軒検出された。

中世については、館の堀跡と考えられる方形区画の大溝が、台地の縁辺部に造られていたことがわかった。過去の調査分と合わせ、この区画がかなり大規模であることがわかってきた。過去の調査成果と合わせて推定すると、少なくとも一辺100m以上の方形区画を形成していたと考えられる。今回の調査区では、方形区画の北東隅から開口部が検出され、出入口の可能性を推定することができた。また、周辺で検出された中世の井戸跡や土壇も、この方形区画との関連が考えられる。



第17地点 第7号溝跡

近世については、旧中山道の側溝と考えられる大型の溝跡と、これに直交する道路の側溝の可能性のある2条の溝跡、溝跡に接するように作られた建物跡など、旧中山道に関連した施設が複数見つかった。

今回の調査では、過去の調査成果と合わせ、奈良・平安時代の集落の範囲、中世の方形区画の規模、旧中山道の側溝と考えられる溝跡など地域の歴史を考える上で、貴重な成果をあげることができた。



第18地点 調査区全景

みやまえ
宮前遺跡 (第2次) 鴻巣市

「立地と環境」

宮前遺跡は、鴻巣市大字宮前字本田に所在する。標高約15m～18mの台地斜面に立地し、西に荒川が南流する。調査区南側は、戦後の造成により平坦な地形となっているが、それ以前は、荒川によって形成された氾濫平野(低地)であった。近世以前は沼沢地であった。現在も湧水があり、市の水源地が置かれている。

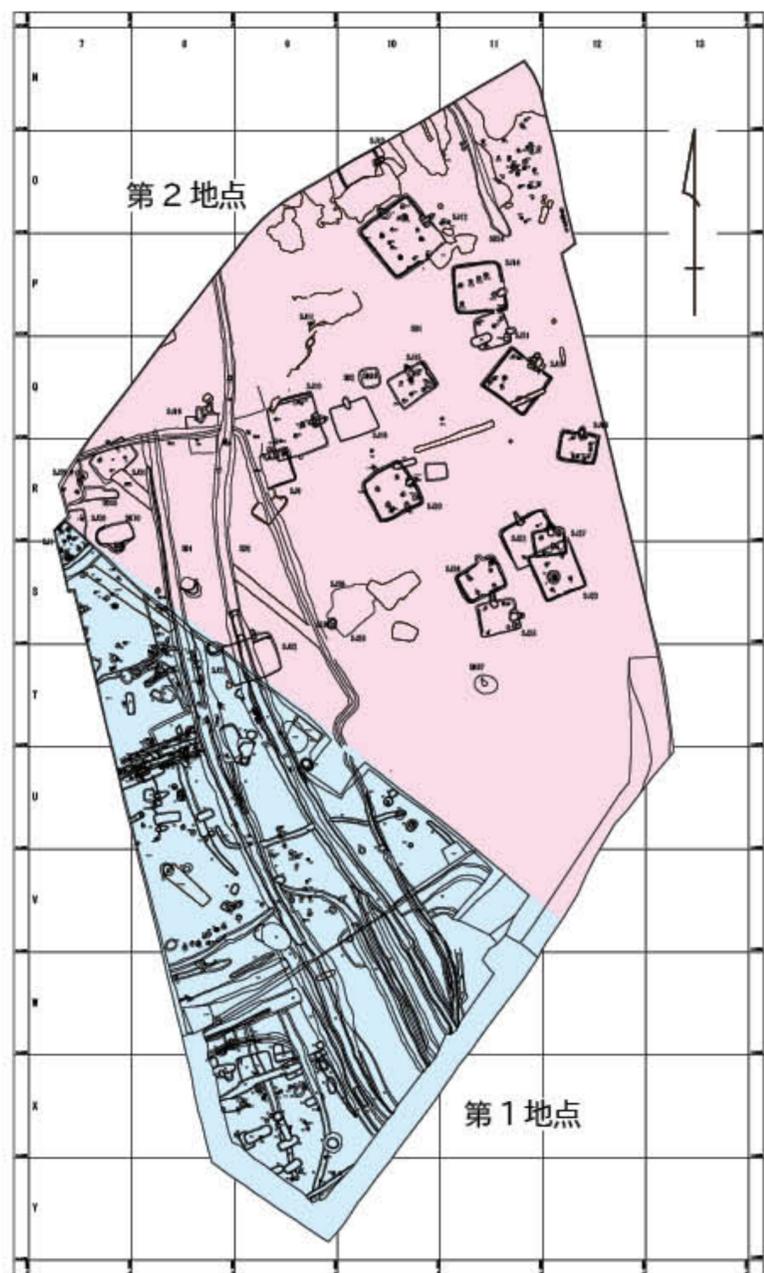
遺跡は昭和51年(1976)に、「古墳から奈良・平安時代の大規模な集落遺跡」として埼玉重要遺跡に選定されている。遺跡周辺の台地縁辺部には、縄文時代から近世にかけての遺跡が分布している。第2次調査に関わる遺跡と

して、近隣の登戸新田遺跡では縄文時代後期初頭から前葉の遺物が、宮前本田遺跡、宮前本田北遺跡からは縄文時代中期後半の遺物が出土した。また宮前本田遺跡では、8世紀初頭の竪穴住居跡が検出されている。

令和3年度に行われた第1次調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。また、調査が進められている近接する平右衛門遺跡では、これまでに奈良・平安時代、中・近世にかけての遺構群が検出されている。

「発見された遺構」

第2次調査では、第1次調査に引き続き、縄



遺跡全体図

文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

調査区は北から南に向かって傾斜しており、遺構の分布、地質や環境が異なる。そのため、高所の北側を「台地」、低所の南側を「低地」、「台地」から「低地」へ移行する部分を「台地縁辺」と呼称する。

また、昨年度から継続する範囲を第1地点として、今年度から調査を行う範囲を第2地点として便宜上区分している。

第1地点

第1地点では第1次調査から継続して、古墳時代以降の遺構と、縄文時代の遺物包含層および遺構の調査を行った。

縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、土壇40基、木組遺構4箇所、ピット141基、遺物包含層1箇所が検出された。時期は、縄文時代後期初頭から前葉である。

竪穴住居跡の掘り込みは失われており、炉と柱穴が検出された。

土壇は、台地と低地のそれぞれに分布していた。台地に立地する33基のうち、15基が袋状土壇である。特に第109号土壇は、直径1.7m、深さ1.9mにも及び、底面中央から小さなピットが検出された。第113号土壇は大部分が中・近世の溝跡によって壊されていた。底面からは、縄文時代後期初頭から前葉の深鉢が、良好な状

- 所在地
鴻巣市大字宮前字本田 336 番地
- 実施期間(事業者)
令和4年4月～令和5年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
4,800㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
縄文(住居跡3・土壇40(袋状土壇15)・木組遺構4・ピット141・遺物包含層1)
古墳(住居跡1・井戸跡1)
奈良・平安(住居跡22・土壇8)
中・近世(掘立柱建物跡1・土壇4(地下式坑2)・井戸跡3・溝跡5・畝状遺構2)
時期不明(掘立柱建物跡1・ピット186)



第109号土壇

態で出土した。その他の土壇も出土遺物や遺構の重複関係により、縄文時代後期初頭から前葉の遺構と考えられる。

低地に分布する土壇のうち5基から、編組製品が出土した。編組製品の出土した土壇は、4m四方の範囲に集中していた。いずれも規模は直径約60～80cmで、編組製品は壁面に接して出土した。編組製品は全部で8個体出土した。内



第1地点 全景



編組製品 出土土壌

第101号住居跡は、規模が長軸3.9m、短軸1.8mで、平面形は隅丸方形である。床面からやや浮いて、大型の二重口縁壺が、潰れた状態で出土した。また、壺の脇から管玉が出土した。出土遺物の時期は4世紀前半である。井戸跡は、第5号井戸跡が台地で検出された。直径0.9m、深さ1.2mで、漏斗状に掘り込まれていた。遺物は、土師器の坏や須恵器の壺が出土した。出土遺物の時期は6世紀後半である。

第2地点

第2地点は、今年度は奈良・平安時代、中・近世の各種遺構の調査を行った。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、台地から

訳は、籠状のものが7個体、敷物状のものが1個体であった。共伴した土器の時期は、縄文時代後期初頭から前葉であった。

木組遺構は、昨年度確認した5箇所に加え、新たに4箇所が検出された。このうち、木組遺構7は、遺構の範囲内に2基の土壇を伴っていた。木材は土壇の中央から外側に向けて放射状に倒れており、木組遺構7は土壇に伴う構築材であったと考えられる。土壇内からクルミが多量に出土した。

古墳時代

古墳時代の遺構は、台地で竪穴住居跡1軒、井戸跡1基が検出された。



編組製品 検出状況

I 令和四年度に調査をした遺跡



第9号住居跡

台地縁辺にかけて竪穴住居跡22軒、土壇8基が検出された。
 第9号住居跡は、長軸3.5m、短軸3.1mで、西半分を第29号溝跡に壊されていた。カマドは北側にあり、崩落したカマド天井の下から土師器の甕が出土した。北西端に貯蔵穴があり、土師器の坏が出土した。
 第12号住居跡は、長軸6.4m、短軸6.2mで、今回調査した竪穴住居跡の中で最も規模が大きい。カマドは当初北側に設置されていたが、その後、東側に付け替えられていた。東側のカマドは、土師器の甕を補強材としていた。第20号、第25号住居跡も同様に、カマドを北側から東側に付け替えていた。

第13号住居跡は、調査区の北端に位置する。北壁は調査区外に位置し、南壁が攪乱によって壊されていたため正確な規模は不明だが、長軸は4.2mである。カマドは東側に設けられていた。第12号住居跡と同様、袖には補強材として土師器の甕が用いられていた。

第29号住居跡は、調査区北西端に位置し、大半が調査区外に続く。遺物は土師器の坏、須恵器の坏蓋、甕などが出土した。カマドは東側に設けられていた。

中・近世

台地で掘立柱建物跡1棟、土壇4基、井戸跡3基、溝跡5条、畝状遺構2箇所が検出された。

第66号土壇と第70号土壇は地下式坑で、いずれも深さが1.5mを超える。第66号土壇は、周囲を第2号掘立柱建物跡に囲まれており、両者は一体の施設であると考えられる。第70号土壇は、入口と主室の境に溝状の掘り込みが検出された。

第7号井戸跡は、直径1.2m、深さ2.0mで、第23号住居跡を壊して造られていた。覆土上層からは、墨書のある須恵器の坏が出土した。

第1、2号溝跡は、昨年度調査した溝跡の北側に続く部分である。両溝跡は調査区外へさらに延びていた。第2号溝跡は、調査区北端では約20〜30cmだったが、南に30mほど下ると1mを超え、一気に深くなっていた。

第15号溝跡の北側も第2地点の調査区内に続いて検出された。途中で西に曲がり、調査区の西側へと続くと考えられる。

「まとめ」

宮前遺跡第2次調査では、第1地点と第2



第12号住居跡

地点の調査を行った。

縄文時代については、第1地点の低地から編組製品を伴う土壇と木組遺構が集中して出土した。編組製品は遺存状態が良好で、当該期の編組製品がまとまって出土した事例は少なく、当時の低地利用を解明する上で貴重な成果となった。また、台地には、深さが1.5mを超える袋状土壇が検出された。同時期に台地と低地に土壇が分布しており、土地利用の場所によって、用途の違いがあったと考えられる。

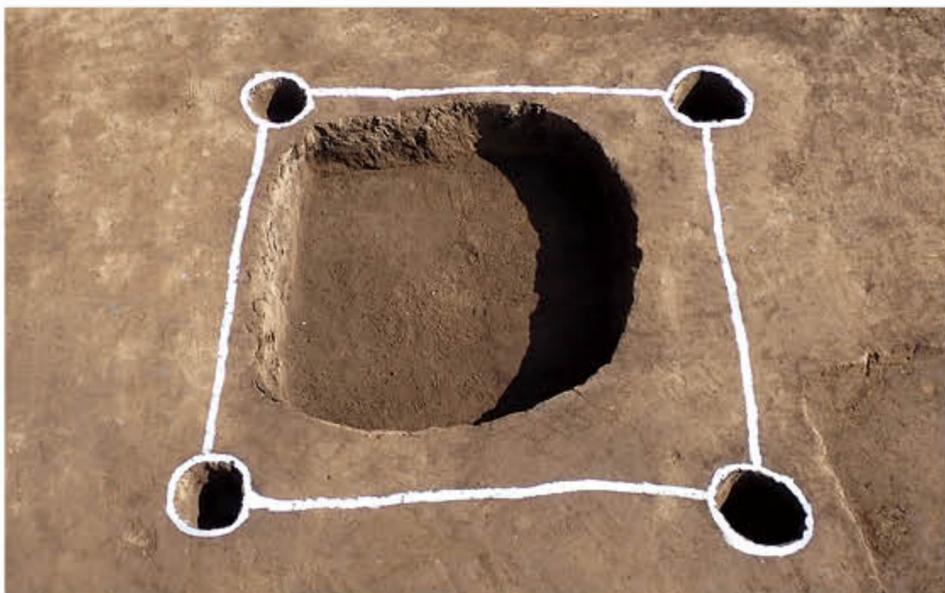
また、木組遺構2〜4は、南北を軸として台地から低地へ向かって木材が平行に並ぶことが明らかとなった。いずれも縄文時代後期初頭から前葉を中心とした遺構群である。

古墳時代については、竪穴住居跡から大型の

二重口縁壺、その近くから管玉が出土したことがあげられる。

奈良・平安時代については、台地から台地縁辺にかけて竪穴住居跡が複数検出された。竪穴住居跡は、同一地点で重複したり、カマドを付け替えたりしながら、継続して集落が営まれていたことが明らかとなった。遺物は、埼玉県比企郡鳩山町周辺の南比企窯で焼かれた須恵器が出土した。

中・近世については、昨年度調査した溝跡の続きを第2地点で検出することができた。規模の大きな第1号、第2号溝跡は、台地縁辺で急激に深くなることがわかった。また、地下式坑2基も検出され、館や屋敷の存在を推定させる成果をあげることができた。



第2号掘立柱建物跡（白線）と第66号土壇